



地域情報紙

ほおじろ

読者参加版

この紙面の主役は読者の皆さま。ご投稿いただいた原稿を中心に、耳寄りな情報を加えてお届けしてまいります。皆さまからのご投稿をお待ちしています。

2014年11月20日

朝日新聞販売会社
(株)エヌ・アイ・エス
広報部

TEL 047-498-4838
FAX 047-498-4839
千葉県白井市根 116-32
川上ビル 202
E-mail: nis@shiroi-nis.com

今回原稿をお寄せくださったのは、高山修一さんの「新聞の楽しみ方&活用術」講座受講者のお一人、富士在住の大山さん。受講をきっかけにご自身の生活に変化が……そんな近況について綴ってくださいました。

「人生捜し物」

大山康郎 (富士)

私は七十三歳。現役で仕事をしているが年のせいか物忘れがひどい。しばしば車のキーや名刺入れなどをどこに置いたか忘れて、捜しまわる。携帯電話もよく行方不明になる。そんな時には、そばにいる人に私の携帯に電話してもらい、着信音で見つけ出す。

しかし、近くに人がいないこともある。「人生は捜し物だ」。こうつぶやきながら、家中をイライラと捜すことになってしまふ。半日かかったこともあった。

ところが、今は違う。「人生は捜し物だ」と、言わなくなったのである。

妻が最近「『人生捜し物』と口にしないようになったですね」と感心している。自分でもイライラしなくなり、なぜか十歳くらい若くなったような気まです。

今年四月二十日、N I S の高山修一先生の「新聞の楽しみ方・活用術」講座で、朝日新聞のコラム『天声人語』を、朝一番に声を出して読むと、脳細胞が活発に働くようになると教えられ、続けていくからだと思う。

夏目漱石の「こころ」も切り取ってノートに張る。夕方には毎日、『天声人語』を万年筆で書き写し続けている。

その効果だろう。私は今、口ぐせだった「人生捜し物」という言葉を忘れてしまいたいようになっていく。

※サザエさんの父の波平さん。「おーい、わしのメガネを知らんか」。見れば自分の頭にメガネ。人間、みな同じ。私もひょいどこかに置いたものが「神隠し」にあうことは日常茶飯。フィルムのコマを逆回転させるように記憶を巻き戻すと、何とか失せものにたどりつけるのですが、それも二三日か、せいぜい一週間が限度。しまったはずのものが「蒸発」することも再三。どれもこれも、間違いなく自分の部屋のどこかにはあるはず、なのですが。(高山)

お便りから

「ほおじろ」はカラーで写真もたくさん掲載されているので友達が載っていないかな？ですとか、その記事の雰囲気や様子をパッと知ることができて楽しませてもらっています。地域のお店の紹介は「行ってみたいな」といつも思っています。これからもよろしく願います。(笹塚 Mさん)

こちらこそよろしく願っています。情報を便利にご利用いただければ幸いです！

私は山登りはしませんが、「風信」の「一歩一歩」は良い文章でした。山の爽快さと山に向かうときめきを感じました。すばらしい表現に感嘆いたしました。(池の上 Wさん)

筆者の高山さんのお話や文章に触れる度、その多岐さ、巧みさに心ひかれます。さすがプロ！

エコキャップの回収を近くで行っているのと知ったので参加しようと思えます。子どもたちがスポーツ取材に行っている記事に感激しました。色々な所で色んな活動をして興味を広げてくれるといいなと思います。(桜台 一さん)

ジュニア記者たち、今後ますます素材新聞制作にチャレンジします。ご注目ください！



▲ 10月26日(日)の講座のひとつ。次回第5回講座は12月7日(日)9:30~11:30 白井市保健福祉センター3F 団体活動室にて開催します。ぜひ、ご参加ください。

いつも楽しく読ませていただいています。白井駅前には普段の買い物で使っていますのでほぼ毎日通っています。これからも周辺住人に有意義な情報提供をお願いします。(小室町 Yさん)

いつも地域の情報をありがとうございます。情報カレンダー、ほおじろ本紙ともいつも楽しみにしています。情報が日付順になつていて、見やすく、市内のイベントをいつもほおじろでチェックしています。毎月これだけの情報を集めて掲載するのは大変かもしれませんが、ぜひずっと続けていただけると嬉しいです。(笹塚 一さん)

朝日新聞への不快感が募る事柄が度々おきましたが、現場の記者や編集の方々の良識と熱意に期待し、今しばらく購読を続けることにしました。広報や、また販売店の方々もご苦労が多いことと思いますが、頑張ってください。(清水口 Sさん)

毎月の読者の皆さま、地域の皆さまにご協力いただき、情報発信させていただいています。ご協力・情報のご提供、ありがとうございます！

ありがとうございます。朝日新聞は今、信頼回復に向け新たな一歩を踏み出しています。私たち販売店も、本社ともども誠心誠意努力してまいります。今後ともよろしく願って申し上げます。

今回のパズルは、朝の通勤電車の中でずっと考えて答えを出しました。何とかたどり着いたけれど、正しいかどうか不安が残っています。また楽しいパズルをお願いします。(桜台 Aさん)

ありがとうございます。朝日新聞は今、信頼回復に向け新たな一歩を踏み出しています。私たち販売店も、本社ともども誠心誠意努力してまいります。今後ともよろしく願って申し上げます。

今月のパズルは、おなじみ須田さんのナンプレです。こちらも難問。ぜひお楽しみください。

文章あれこれ③

高山修一

歌舞伎十八番の「勧進帳」は、兄頼朝におわれて奥州にむかう義経主従が安宅の関で関守の富樫の殿しい詮議にあい、家来の弁慶がとつさに東大寺の勧進だと称して、白紙の勧進帳を読みあげ、さらには怪しまれた義経を錫杖でうって難をのがれるお話。

安宅の関は筆者の生地に近い、日本海に面した松原には勧進帳の場面の三体の大きな銅像がある。じつは義経一行が通った関所は荒波にけずられ、沖合はるか海に没してしまつた。若い時代、事件記者だったころにしばしば仕事で演じたのが

勧進帳だ。

事件、事故があると現場に急行、大急ぎで取材する。原稿は無線や公衆電話で支局や本社に吹き込む。締め切り間ギリギリにゆとりがない場合に、メモ帳と記憶を頼りに、頭の中で原稿を書いて読みこむのを勧進帳といつたのである。

緊張感をともなう作業で、推敲する余裕のない、いわば綱渡り。必要なのは名文やうまい言い回しでなく、焦点を定めたデータ中心の文章。気合いがはいっているからか、時間にせかされても間違えることはなかった。そんな場面を今も夢にみる。悠々とことが運び、満足、満足という夢をみるのがないのはどうしてなのか。